

書道家・山村龍和×将棋棋士・羽生善治
特別対談

本対談を無断で複製、転掲載することを禁じます

©イマジンクリエイト

直感は足し算、ひらめきは引き算

山村「本日はありがとうございます。よろしくお願いします」

羽生「よろしくお願いします。龍和さんは書をはじめて20年を越えるということですけど、人間の成人までと同じくらいの長さですね。とはいえ書の世界の道のりは長いですね」

山「はい、そうなんです。年齢によって表現の質や手法なんかも変化するものだと思います。将棋の世界では20代30代と年齢を重ねると、打つ手も変わってくるものなのではないでしょうか？」

羽「そうですね、明らかに違ってきます。たとえば若いころでいえば反射神経とか、そちらのほうが強い傾向がありますが、年を重ねるごとに精神的な打たれ強さとかそういうものが鍛えられていくという違いはあるかもしれません」

山「なるほど、対局の中ではリスクを取らなければならない選択もあるかと思うのですが、リスクの取り方についても変わってきますか？」

羽「そうですね、まあ若いころはリスクと知らないで取っていることもありますよね(爆笑) まあ30代40代なり人生を知ってくるとだんだん知らない間に、こうやるとけば無難にそこそこ平均的なものになるかってことを自然に覚えてしまうっていうのはあって(笑)、惰性とか習慣っていうのは恐ろしいものだと思います」

山「そうですね」

羽「まあでも一方で、これはどの世界でも共通していえることなんですけど80歳とかになってくるとそもそもリスクってものが存在しなくなるんですよね(笑)」

山「もうここまできたら、どうでもいいかっていう(笑)」

羽「ええ、ええ、なにがあっても怖いものはないっていう(笑)それが最強なんじゃないでしょうか(笑)」

山「リスクの捉えかた自体が変わるのかもしれないね」

羽「そうですね。」



羽生善治 Habu Yoshiharu 昭和45年埼玉県所沢市出身。6歳で将棋を覚える。12歳、6級で二上達也九段に入門。昭和60年四段に昇段。プロとなる。平成元年初タイトル竜王を獲得。平成8年七冠王となる。永世名人、永世棋聖、永世王位、永世棋王、永世王将、名誉王座の資格を持つ。著書に羽生の頭脳1-10、(日本将棋連盟) 大局観(角川書店)等がある。

山「羽生さんは著書の中でリスクを取ることが大切だという意味のことを書かれていますよね」

羽「そうなんですよ、それで手紙とかもいただいて『会社辞めました』と書いてあったりして、うわ、これは責任取れないぞ、とか思うこともあったりして(笑)」

山「ははは(笑)」

羽「ははは、よく考えて行動してくださいという話です。背中を押しているわけではないので(笑) それはさておき、書家を目指す時に、そういうことは考えましたか？」

山「ああ、そうですね、実際すごく考えました。書の世界でもご飯を食べていくことはできると思うのですが、やはりそれだけの覚悟とリスクが伴うと思うんですね。高校時代は書を専門で学ぶ学校に進学したんですが、周りは女の子ばかりでみんな将来それで食べて行こうとかっていう雰囲気はゼロでしたし。それに学校と言う場所は芸術の創り方は教えてくれる。ですが、それをどのように仕事にしていくか、実業的な部分は全く教えてもらえませんでした」

羽「ああ、ああ、そうですね。」

山「ですので、自分自身の感性なりを磨いていかないと難しい世界ではあります。
リスクに関しては私は鈍感なのか、開き直っている部分があるのかもしれませんが。
日本人ってリスクにはおおらかな部分があると思うんです」

羽「ほう」

山「日本は太古から災害が多い。3・11の大地震や津波も記憶に新しいですが、まさに自然との向き
合いです。いつ襲ってくるかわからない自然災害は生活に直結した大きなリスクです。
被災してもそこから立ち上がるたくましさは日本人にはありまし、予知する能力もあるのでしょう。
他の民族と簡単には比較できないですけど、やはり直感力という部分で優れた感性をもっているのかも
しれません」

羽「ええ、ええ、そうかもしれません」

山「そこで、直感ということについてお話したいのですが、
直感とひらめきの違いとは何なのでしょう？」

羽「そうですね、経験に基づいているものが直感だと思います。
なにか答えが分かるのが直感だという人がいるのですが、私は将棋をやっていてそうではないと思うん
です。つまり、これはやってはいけないとわかっているのが十分直感なんです」

山「なるほど」

羽「なにをやっていいか答えがわからなくても、これはやっちゃいけない、とわかることがすごく大切
な事なんです。直感とひらめきでいえば、相反するところもあると思います。直感と言うのは様々な知
識や経験を積み上げていく中で磨かれていくものですけど、ひらめきの場合は何にもなしの無とか、も
うなんにもなしの「ム」なんですけど(笑)、いろんなものを捨て去った状態でやってくるものなんじゃ
ないでしょうか」

山「ああ、そうですね」

羽「だから、究極の引き算ですよ。」

山「なるほど、直感が足し算なら、ひらめきは足し算に例えられると」

羽「そうですね」



山村龍和 Yamamura Ryowa 昭和 59 年奈良県出身。7 歳より筆を持つ。

日本有数の書の専科、奈良県立桜井高等学校普通科書芸コースで伝統的な書の研鑽を積む。

三重大学教育学部卒業後、書道家として独立。2010 年渡米。NewYork で世界的な芸術家や社会活動家、ハリウッド俳優と出会い、大きな岐路となる。それ以降、「アートとしての書」に開眼する。現在の拠点は京都市。国際書芸協会代表理事。日本胎教協会®発起人。

山「直感を使った方が前に進めるような気がします」

羽「私は、着実な直感は一距離向けで、ひらめきは遠距離向けな気がします。

何年も先のビジョンとかは、ポーンとボールを投げるようにひらめきで決めてしまって、その後の微調整とかは着実な直感にしたがって修正していくっていうのが上手くいくような気がします。着実に積み上げる直感で遠くのビジョンを決めようとしても時間がかかり過ぎてわからない(笑)」

山「そうですね」

羽「書の世界でも先人たちのセオリーとかツールとかを如何に踏襲して、

それに関してどのようにオリジナリティを出していくかっていうことがありますよね」

山「そうですね、特に日本の書の世界は家元制度のようなシステムが出来上がっていますね。

お師匠さんがいてお弟子さんがいてピラミッド型。まさにヒエラルキーのようになっています。

40 歳とか 50 歳は洩垂れ小僧と呼ばれ、70 歳とか 80 歳になってやっと一人前というなんとも珍しい世界です。あんまり言いすぎると怒られますからいいませんが(笑)」

羽「笑」

山「まあ、私は途中からどこにも所属しないことを良しとしているのですが。
それでも礼節は、わきまえているつもりですし、先人への敬意は大切にしています。
将棋でも師弟関係はありますよね。対局の時の席の座り位置もそうですね。
日本の精神が流れていますよね、礼に始まって礼に終わるといような」

羽「将棋は今のルールになってちょうど 400 年くらいです。基本的には変わっていないのですが
だいたいここ 10 年か 30 年くらいでその前の将棋と全然戦術が違うんですね。
絵画の世界でいえば現代になると真新しいことだけに価値があるということがありますが、
将棋にも似た傾向があります。これが本当に良いのかなと思うことがあります。
やはり歴史とか伝統を紐解いていくことはすごく重要なことで、長い時間続いているものには
多くの人に関わっていて、そういうものとどうい風に向き合っていくかが問われますね。
個性を出せる部分というのは少なくなる気がします。私の場合はラストスパートまでもぐっていて、
最後に出すっていう」

山「最初から古いものとか型を無視してやればいっていう人もいますよね。
けどそういうのはカタナシだと私は思います。練習を繰り返す中でその人にしか出せない線とか書体
とかが生まれてくる。そういうものがその人の個性だと思います」

羽「なるほど」

豊かさとは、「時間持ち」である

羽「いろいろな企業家さんとかの集まりってあるじゃないですか。そういうところで名刺を交換したり
するものなのですが、たとえば会社勤めをしているという、話をしてくれない事とかがあっていうのが
あるそうなんです」

山「ええ」

羽「自分が何をやろうとしているというアイデアや方向性がないと相手にされない」

山「なるほど」

羽「そこまで行かないにしても大事なことはですね、皆がそれをやるっていうことではなくて、
認めるとか黙認するっていうのが大切なことで。こんなことをやりたいていう人がいたら
ああ、やってみたらいいんじゃないか、って大きく受け止める社会であればいいと思うんです。

すごく刺激的な事とかじゃなくてちょっとした意識の持ち方とか考え方で社会は変わるんじゃないかなと」

山「自分自身がどうありたいか、何をしていきたいかっていうのをまわりや組織に流されないで持ち続けていくという姿勢も大切ですよね。以前羽生さんにお伺いして大変感銘した言葉がありまして。それは豊かさとは時間持ちなんだっていう言葉なんです」

羽「ああ、ええ、ええ。まあ色々な定義があると思うんですけど。ちょっと説明させてください。たとえば、お金持ちが豊かさだっていうことがありますね。いろんなものの価値っていうのはマーケットじゃないですけど常に変わっていくものじゃないですか。1年とか2年とかちょっと引いたところで見ているとそういうことが見えてきます。で、どう考えてもお金の価値って下がっているんですよ」

山「お金の価値が下がっている・・・」

羽「そうなんです。別にそれはいいとか悪いとかっていう話じゃないんです。時代の流れでただそうなっているってことなんです。じゃあ、何があがっているのかということになります。それはやはり、時間をたくさん持っている。時間がたくさんあってそれを充実したものとか自分がやりたいこととか、好きな事とか、あるいは皆のためになる事とかでもいいですけど、そういうことに費やせる。そういうことの価値がすごく上がっているような気がするんですよ」

山「ええ、ええ」

羽「でもそうは言っても日々暮らしていかなきゃいけないわけですよ(笑)」

山「もちろん(笑)」

羽「たとえばすごく仕事が忙しい状態で、時間がない。まあ、その内容が全部自分のやりたいことで、自分に合っていれば問題はないんですけど。なかなか大半の人はそうじゃないでしょうから。そういう意味で時間をたくさん持っているっていうのはかけがえのない貴重な財産。もちろんそれをどういう風に使うかっていうことは、あると思うんですけど。今の社会で時間が自由にあるっていうのは・・・ あ、仕事がなくなるってこともありますよ?!(笑)」

山「ははは、明日から何して生きて行こうっていう状態も確かに自由ですが(笑)」



羽「棋士の仕事っていろんな浮き沈みがあって・・・、
デビューして間もないころに、2連敗か3連敗したんです」

山「え、羽生さんでもそんなことってあるんですね」

羽「あるんですね。そうするとですね、1か月間くらいまったく対局がないことがあったんです」

山「そうなんですねえ」

羽「そうすると将棋連盟とか組織には属してはいるんですけど、失業しているような気がして(笑)」

山「(笑)」

羽「ええ、ええ、だから（時間が）ありすぎると持て余してしまうってことがありますよね。これまでものすごく忙しく過ごしてきて、いきなり膨大な時間を与えられると、
もう わかんなくなっちゃうんですね。だからそういうのって、ある程度慣れておくっていうのが大事ですよ(笑)」

山「ははは(笑)」

羽「事前に。(笑)いや、本当に(笑) 無限じゃないんですけど無限とを感じるような、膨大なものを目の前にして立ち尽くすってことが結構あるんですね(笑)体感として無限を感じる。
龍和さんの作品に『オーム』がありますけどあんな感覚ですよ(笑)」

山「一切無限(笑)」

羽「そう、一切無限です(笑)」

山「そういう意味では芸術家と言うのは時間と向き合わなければならない存在ですね。作品を書く時間、その間は無ですよ。巨匠になってしまえばそれで一生生きていけるわけですからいいんですけど。でも、大半はそうではなくて、売れても売れなくてもただただ書き続ける、造りつづける、そういう葛藤の歳月と日々向き合っていかななくてはならない」

羽「あー、そうですねえ」

山「よく芸術家仲間なんか、昨日徹夜したとかっていうのを大変だーって言う人がいるんですけど、心配なのはそこじゃないんですよ。
それで一生やっていけるのかどうなのか、ってことのほうがよほど心配な訳ですよ」

リラックスする時間をもてば、頭が整理される

羽「そういえば、書を書く時間って決めているんですか？」

山「そうですね、ちりちりバラバラですね。全然決まっています。朝書く時もあれば夜書くときもあります。これだっというものが降りて来たときに書きたいタイプなのかもしれません。
なので時間に関してはとても自由ですね」

羽「朝に書いた字と夜に書いた字ってというのは違うことってありますか？」

山「そうですね、夜書いた字はゆがんでいます。単純に眠いんで」

羽「(爆笑)」

山「朝の方が脳はさえています。その視点だと、よくこんなものが書けたな、よい書が書けたなと思うことはあります」



羽「ええ、ええ」

山「早朝から朝にかけてっていうのが多いと思います」

羽「んー、そうなんです。こういうものを書こうという構想はどの時に思いつくんですか？」

山「だいたいいつも頭の中でイメージしていることを再現しているタイプなんです。暗算とか丸暗記は苦手ですけど映像として見えている世界を再現するのは得意です。家で 30 分のアニメとかを見てそのセリフとか動きを再現したりします。奥さんの前で演じてたら、もういいよ。って言われてどうしようもなくなるんですけど(笑)書を書くのもなんかそういう、右脳で見たものを左脳的に落とし込むという作業ですね」

羽「へえー、じゃあ、映像で思いついている世界を字に落とし込んでいく、凝縮しているような感じなんです」

山「ええ。日々そういうイメージをどれだけ鮮明にできるかということ大切にしています」

羽「たしかにそういうものは、今まで自分が見てきたこと感じてきたことの蓄積ですよ。その中から次のヒントとか新しいつながりとかが浮かぶわけですね。どんなときにそういうのってつながりますか」

山「あー。そうですね、あまり意識はしないのかもしれないんですけど。そうですね、たとえば電車に乗る時でしょうか。電車に乗る時に自分がどれだけ美しいフォームで乗れるかをイメージするとか」

羽「作法ですか」



山「はい、立ち居振る舞いですね。芸術って日頃の思考が出てくるものなので。私、結構大ざっぱな性格なんです。それで、書の世界って2つのタイプに分かれると言われています。とんでもなく大雑把なタイプか、とんでもなく几帳面なタイプか。几帳面なタイプは平安時代のかな文字とか小さい字を書いたりするのが向いているのかもしれませんが。私みたいに大雑把な性格ですと大きな文字とか動きの大きいダイナミックな文字を書くのが向いているのかもしれませんが。だから日々の生活の中の動きを意識することが多いです。普通の人には電車に乗る時のフォームとか気にしないと思うんですけど、筋肉の動きとかも書の線とかに影響してくるものなので」

羽「ええ」

山「中国では書道の学校があるんですけど、そこでは書道を教える前に体操を教えるんです」

羽「あー、なるほど」

山「体操を教える中で使う筋肉とか感覚を鍛えて書道の鍛練に活かしていくんですね」

羽「ああ、ああ、なるほど。それは大きな字ですと特に、手を使っているというか、体全体を使って書いていくわけですからね」

山「そうなんです。将棋はやはり、まさか重たい駒で練習したりとかは・・・ないですよ(笑)」

羽「(笑)そうすると内容がガラッと変わりますね(笑)この角が持てないー、鉛の駒だーとか(笑)」

山「駒によって重さが違うとか(笑) 将棋の研究は時間帯は決めていらっしゃるんですか？」

羽「いや、決めているというよりはいつでも頭の中でできるんですね。別に道歩いていてもどこにいても将棋のことを思いうかべようと思えばできるので。あんまりにも考えすぎて考えすぎてなにか思いつくという事じゃなくて、なんか普通に過ごしていて、あ、こんなものもあるか、とパツと思いうかべるというのがあります。この、なんにもしないっていうのがいいんですね。なんにもしないでぼんやりしているっていう時間がある程度あると、なんだかそれでリフレッシュされるというか、頭の中が整理されるという感じがあって。まあ、でもこれって全部頭の中の話じゃないですか。

だから頭の中で一生懸命考えててもぼーっとしてても、働かなければまったく同じっていう(笑)」

山「いやいやいや(笑) でもリラックスすることは重要ですね。リラックスすると脳が整理されて直感も出やすくなる」

羽「なんにもしないで忘れちゃうっていうのが大事なような気がしてて。

どうしてもこう、都会の中で暮らしていると文字なり光なり、常に何らかの情報に晒されるじゃないですか。入ってくるものの量が多すぎて対応しきれないっていうのがありますね。自然の多い場所にいて気分がよくなるのも、そういうものがなくなるっていうこともあるのかもしれません」

山「羽生さんの本にも確かリラックスする時間を大切にすると書かれていますよね。

羽生さんのように歴史的な偉業を成し遂げる天才的な方はリラックスする時間を大切にされるのだと思うんです。なにかこう、リラックスのコツみたいなものってあるんですか？」

羽「んー、まあ、力を抜いて脱力すれば・・・(笑)」

山「ははは(笑)それがなかなかできないからって、いうことなんですけども(笑)」

羽「書もそうだと思うんですけど、力を抜くのは、大切な訳ですよ。手の力を抜き、脚の力を抜き、肩の力を抜き・・・」

山「だんだんと順番にやっていくわけですね」

羽「全身の力抜いてタコみたいになったら困りますけど(笑)部分的に力を抜いて行けるところを抜いていくっていうのはありますね」

山「そう考えると書は書く前からの作業にリラックスに向かうための仕掛けがあります。たとえば墨を磨るという動作です。繰り返しの作業なので軽い瞑想状態に入っちゃうんです。また、墨には香りの成

分もありますから、香りはリラックス効果を高めるんですね。

よい墨は力を入れて磨ってはいけません。弱い力で磨った方が墨の成分が細かくなってよい色の墨が出来ます。昔から"墨磨りは子どもや女性にやらせろ"というんですね。私は右利きだからあえて力が入りにくい左手で墨を磨ることもあるんですけど、これは意識的にやると立派な能力開発になるんですよね」

羽「ほー、おもしろいですね」

山「まあ、私もぼーっとしているほうですよ。前に電車とホームの間に靴を落としてしまったことがあって。もう片方の靴を掃除していた妻に見つかって、これ何に使うの？って言われました(笑)」

羽「素敵な奥様ですね(笑)」

山「自然にぼーっとできることもあれば、環境によってなっていくこともありますね。たとえば瞑想するとかじゃなくても、すこし眠るとかっていうのもすごいリラックスすることがあるんですよね」

羽「そうですね、これはですね、私はクラシック音楽のコンサートに行ったときなんか、すごいよく寝ちゃうんですよ」

山「(笑)」

羽「あのですね、CDではだめなんです。CDでは。眠ることはあるんですけど、眠りの深さが全然違うんです。生演奏はよい演奏ならよく眠れるんです。

だから知り合いの音楽家の演奏の時は行きづらいんです」

山「(笑) 羽生さん寝てたでしょって思われますからね」

羽「これが最高のリラックス法だとは言えないでしょう(笑) やはりライブの生の音だとガクッと行きますね。クラシックもそうでしたし、雅楽もそうでしたね。ぷわーって音を聞いたらもう、ガクって(笑)」

山「雅楽の時も寝てたんですか(笑)」

羽「でも、起きたらすごく元気なんです」

山「ははは(笑)まあ、リラックスはやはり大切ですよ」

忘れること、捨てることが大切

山「先日、脳科学者の茂木健一郎さんとお話することがあったんです。その時に伺った羽生さんのエピソードですけど、羽生さんは車の運転はしない。なぜなら運転中に頭の中で対局がはじまってしまっていて危険だから。これは本当のお話ですか？」

羽「ああ、そうですね。昔、将棋会館から自宅まで自分で運転した車に乗ってたんです。夜遅くなったときとかに帰るのが楽なんで。で、当然ながら、対局が終わってすぐの時とかって、脳がクールダウンしていないんです。ときどき対局のモードとかに切り替わってしまうことがあるんです。5秒とか10秒でも信号通過してしまったりするじゃないですか。だからこれは危険だなーと思って、それから運転はあまりしないようにしています」

山「それはすごいことですね、普段、車の運転以外のときに急に脳がガラッと切り替わってしまうことはないんですか？」

羽「ええ、ですから極力普段はそういうことから離れるようにしています。まあ、たまにありますけども。考える時と普段というような、スイッチの切替をしています。まあ、そういったものっていうのは年数を重ねていくことで自然に身についてくるものだとは思っています」

山「お若いころはスイッチの切替は難しかったんですね」

羽「そうですね、気持ちの切替とかも含めてですね。あと記憶と連動しているとも思うんです。記憶が良い人っていうのはスイッチの切替が難しいと思うんですね。でも、忘れっぽい人は忘れるからすぐに切り替わるんですよ」

山「忘れること、捨てることは大切ですね」

羽「どんどんいろいろなことを全て忘れてしまうっていうのなら問題がありますが、忘れてしまったような感覚でいろんなことを観る、判断する、認識することができたほうが、多くのことが思いつくじゃないですか」

山「なるほど」

羽「つまり、今まであったことがなかったとして話した方がよいアイデアが浮かんだり」



山「白紙に戻すということもよいアイデア作りのプロセスとしてありますね。将棋を通して学んだ人生訓のようなものはありますか？」

羽「そうですね、自分の未知の土地とか場所に行くっていうのがいいんじゃないかと思います。旅行とかがいいのはいろいろなものがわからないからいろいろなものが磨かれていくというのはあると思います。でもまあ、これも但し書きが必要で、だからといって戦場とかに行っちゃダメですよ。

自分自身が将棋をやっていく中でそういうことは大切にしています。

自分の経験値とかやってきたことが生きないとか生きにくいという局面を大切にしています。毎回ではないんですが、極力そういうことを大切にしています。そうしないと同じようなことを過ごしてしまうとよくないですね」

山「遠いところに行くことで抽象度があがりますよね。将棋では大局観が大切だと羽生さんは説かれます。ではその大局観と言うのは全体を俯瞰する力なわけで、人よりもいくらかも高いところから物事を眺め本質を見られるかということになりますね。私が思うに幼稚園児には幼稚園のことがわからないが、小学生になれば少しわかる、中高生になればもっと幼稚園が何なのかわかってくる、

これは抽象度が上がったという事であり、スケール感があがったという事でもあるんですね」

羽「そうですね、100m 上から、1000m 上から見える景色は違う。じゃあ 1000m 上から見ればいいのかといえばそうでもなくて、上過ぎて何にもわからない(笑) 視点が変わることが大切なんです。将棋では自分の手を読むことは難しくないんですね。相手の手を読むことが難しい。それは、こうなっ

てほしいとかそうあってほしいという自分の願望とか欲望が入ってしまうから難しくなるんですね。

もう少し中立的に客観的な視点でどうということが起こるかっていうのを読むっていうことがすごく大切ですね」

山「ええ、ええ」

羽「一方であんまり広げすぎてもよくない。迷ってしまう。例えば、定食屋に行ってメニューが 30 個とかあると、自分が食べていないメニューも気になってしまって後悔することになる。たくさんの視点とかがあるほど、後悔はしやすくなるんです」

山「無駄な思考とかを捨て去るのは重要なんですよ。外面的に言えば掃除が当てはまりすよね」

羽「私も古い棋譜とか捨てますね。ある程度たまってくるとどこになにがあるかわからなくなるのでそういうときは思い切って捨てます。ものをすてる持ち物を少なくするっていうのは部屋がきれいになる以外に気持ちの整理がつくっていうのがあるんですよ。

だから、もうこれはいらないっていうのを捨ててしまうことによって、大げさにいうと覚悟が決まるっていう。でも捨てた本を後で読むって買い直す時とかはあるんですけど。

でもそれはそれでいいんだと思います」

山「流動性と繋がるっていう視点もありますよね」

羽「自分の身の回りにある流動性が滞ってしまうといろんなものが滞ってしまう。なんでもいいんですけど、人にあげるとかもらうとか、それで流動性が高まっていると、自然に好循環なものが生まれるように思うので、流動性については私は気を付けています」

山「流動性という意味では人間関係に当てはめてもおもしろいかもしれません。疎遠になっている人、もう会わないだろうとか、しばらく会っていないとか、数年以上あっていない人の名刺は捨ててしまうとか、人間関係も流動的なものですね。」

羽「そうですね」

自分を起点に世界に影響を及ぼしていく

山「人間関係といえば、6 次の隔たりという言葉が面白いです。6 人の人を介せば、世界中のどんな人にも会うことができるという。たとえば、アメリカの大統領に会いたいとします。そうすると、私の知り合いの方に政治家がいる。その方は総理大臣ともよく会う。総理は当然アメリカの大統領にも会うわけです。これで 2 人介せばアメリカ大統領にたどり着いちゃう。アメリカ大統領ともなればそれこそす

ごいネットワークを持っているはずで。こういう人脈ターミナルのような人を介せば一気に世界は狭くなるんですね。これは本当に面白い。こういう理論に基づいて出来たのがインターネットの SNS です。facebook は、いまや世界的に広まっています。

自分自身が立ち向かっていく姿勢が大切なので、横のつながりを持つことは勇気にもつながりますね。実は自分にはすごい可能性がある。なんととっても 2 人を介せばたいいの人につながる。だからこそ、世の中を平和にしたいとかっていう壮大なメッセージを伝えていくこともしていけばいいんです。自分 1 人でも影響力があるんです。自分自身が灯火となって世の中に発信していく信念が大切ですね」

羽「そうですね、思った以上に一人一人の力は大きい。社会人になるとどうしても仕事だけの人間関係に費やしてしまう。地方へ対局に行くと、地元の婦人会とか青年会とかの役割が薄くなっていると感じる。警察の方とお話ししていると、一昔前の犯罪捜査は聞き込みだったそうなのですが、今はそういったものでは犯人はつかまらない。では何かといいますと、防犯カメラであるとか、そういう科学的なものなんだそうです。そういう風につながりが薄くなっているからこそ、なにかあったときに、横のつながりが大切だと思いますね」

山「自分自身がなにもできない、というのはただの思い込みです。マイナスな思い込みは離脱していく思いの持ち方が大切です。私は書家なので、書を通して平和のメッセージを発信していこうといつも思っています。世界を変えていくのは結局自分を変えることなので、書を通して自分を変え、世の中を変える。これがとても重要なことだと思っています。今日は本当に長時間ありがとうございました」

羽「ありがとうございました」